俳風
柳多留 十七編

へ 9
1147
17

川柳評

拾七篇

誹風柳多留

細くともふとりの表紙と見つらぬ　角力句合

堀り高数と堀り上し誹え残りん　樹ゝん句合

特 9 門 へ
號 1147
巻 17

寅正月吉例角力句合

以来とみてと流くのも古風く　蓬莱連亀遊

若水て始る人の名なるき　栟水、扨印

乳母ひハそれ月へも指をさし　今、

浅漬のつまて来るのも廿の子　櫻木、亀勇

一ト筆もんとかりし　それ箒さ　鳳凰、土雷

手びさ鍵さし小雨して手むな　栟水、排李

出かハし　さ笑と小引んで分へる　高根、東水

廿のすざさ鰻の是がなりがり　櫻木、木綿

すじを引いこそちがい柳と遠ィ　鳳凰、土雷

中宿でみふの裾のとえ三寸ね　伊波、横好

枕えみと去き嫁　ろうしまる　櫻木、兎明

よそもすくそらきして机と稼　栟水、石波

婦解もそのかかる男く　鳳凰、土雲

花とえかてらし神と来く　高根、鳳頭

大段ハ若親上下も浅ぃ流ら　杜若、如雀

宿生猫なる国ヽのやまし　さ　井蛙、狐声

まうく川ふむざとかくる面白さ　真砂、土盛

中絶ハよい詞かに宝男とたちきり　玉水、
おしうしさ一度が十七月　柳水、雨譚
きれ初でなんぞ孔志のかぶりし　櫻木、木綿
乳を出しつりかしこまんにやまよ　柳水、十印
門本をぬくらりおくめがへる　櫻木、鬼明
一日をいふくの中へ出かと立　仝、亀勇
年始かすむと帰り入れ井　八重垣、中葉
今日のくれけり嫁も出し　柳水、雨譚
法橋の嘘り成こそました　櫻木、廿扇
ちいはりのらうをえて出て宝を持　伊呂波、琴亭
かづと有同前でり火打か他とる　櫻木、狐声
大当り毎々毎らぞろろく　仝、免明
おやかもはいれ思えといふほど　伊呂波、萬故
嫁の出るを思ひかごろひ出かうき　若菜、淺裏
二十一さと三度の浮華する　八重垣、狐声
廿すづつさげて花ひかに出る女　櫻木、木綿
おふくろへ五ハごみとまかせ　高根、鳳頭
くぼしと姥のするど母と海り　鳳凰、水硯

びらゝゝりずず首ハがくしをかへり　柳水、玉簾
ずぶぬれになつて帰ると若衆ハ　櫻木、玉章
巻紙とながながおそをそつとなく　柳水、雨譚
亭主もとさえ小判せんなく飯ヶ森　玉水、
三絃稽古ハ絶えてこまらせる　蓬莱、立遊
おつとさんハあとでと鴨かうてる　櫻木、横好
かくまへるものいろゝ炭俵　柳水、雨譚
ばゞさんの火がかりハやかしかまし　櫻木、律長
りんしうとかくるせんしし高きぬ　柳水、雨譚

すゞ小袖くれて男にしかられる　櫻木、杉寿
まつ黒なもちをたべハ見世ま遊　仝、仝
おきやがれとつれなしのそゞろさ　仝、仝
あやまち花めでより波のしかねる　仝、仝
梅さくらひとすまゝに生碎く　仝、仝
さし日影かくさびあてよねさ之　仝、仝

催主　星墨亭
補助　蕭秀亭

すんでるひすめとらしくらつてまた
のりものとことろがなき川　はたへ
くらい川かなしくついはり　へなき
ならんなさ女房をくずとはきかし
ろやつさ笑やまじとしれてかごかのり
あさかゆもつると君つめる　るかかごと
うけ合が出来てさ急ひ君ずるなり
女房ハかゞでか急れて君かし去る
おぶれでござると御　かうんべり

くくそら徒了どもしるくせりてひ
あいの本を　飯さ母より八君が言し
さんざ内のちへで帆ぞしくが純をへる
けてそのく市と負ぶいとめし直る
せい後して　次八とする名くこれ
そらで流ル名としけがさか　坊さくひ
由ーー海かーー　長方右の　塔が　供へ
海ねむのがや　海になのさへ　かんなさ
さり　怀の　許を　おもし　いんとふどし

稽古にかゝりながら三味線出し
身よりもその外のその手のすゞさ
声いせいのゑさしとりけしさけれし
子どもらしく稽古にうるさくして紅
年礼のかへるすがた、すへりより
小ごりあまんもりゆきあさじさえ
里人とおもひて居るやつも　かご
行きうちしける男咲とのつけ出し
師の清きにこぎり書せめつきしれる

かなくしたふして経へ　かごのこり
也みえの房しまとめと書て坐
おかしらしいかんど払ふさ口へ入て
出ていさと祇んごらが周武へ入り
かんじしが村のまりの師匠へ
悪んおさ志ゆへんへんとし留
行くしを打きおし男とぬが志め
笑しらが外らや手門すする誹りその
さ其師へ其と出しける右之那

いせ屋をかしく云る屋を大ふざけ
なまゆりといはれて門並にかゝまる
ゆめでいふとおやぶのは嘆く
十日のうちやくしこ仕事く
風らぬ子のなる紳の気げく
祐もの思ひこさ名どのさされ
なき並てお川をぶざして祝ふこ
や仙さゑし是どこてうら川て来る
うち是りが喜ひを　立札ゆどらる色

なきなへも喜ひつやふざけか坊がつき
おれもぞうひとを　女房むごいけ
後家のとしうちでがなるいや合ひ
ゆどつりゆどアといましい秘密
出て紙くハ川かしいやとり　さそる
くぶりしんばしらぞよなしい
まろいろてちさへのるれを出来ぶつ
りふやんへうぞ二三人おんせされ、
きんしここせんのいとがなりやす

はのすゝきんでんごしよのさやう
まいる淡路さんけいとゆするる
よしくおしやひよめとはめり
うけとりとみておいで薬師とある
堂をおろしや　嫁入　は
堺関の白ひかゐて船へ出る
はなれても中に居る事りはいよ驚
手いきを下り及くらんいうきゆ
日本へ乗てもみんなつとやめ

十三参り　ここやんてさうく
わすゝのそはんじらいきやくとお
おくさ参り　へ母　きうとすくる
西のうんういすのふ屋いやく
はめうけを根もおそらくいせいし
ここやんと出いく手ごしいちご若
はうもめかしのるので世にも出すらく
新堀や　見うし　江戸へ　くいすある
尾張丁しんざ　ホ町　千てはり

は袮がひと文をおかしと思ひけり
と男これを見てはつと伏しきく
思ふもよらぬびの行ふ捨とあり
屋がくとくらし中川出をかいかきれ
六文字母へお囲りしてひ川へしさ
房別れくもこれ出ほ平の身
おそろしさあるくと語てこらく
のらくハとつお内こそみなく
まはく八業その日もさ川てる

おその女がりけさぞ喜びて主人
女房と同じく八坊ケぞはきがんさ
古月に日本ばしハ前寺に了
こしがいでかるお出かんそもきん
のむすめとなりとは国と主人其の
むしをまげはくとし説明しとを
がんでいそし女房をふくと出して途
おそろまりそゆく出囲ともするさ
やうじ屋の名がし白い馬う出し

すいる様ぶんけて松まく参る勝る
おもふさまふか仲居めでござ候
かまゝ春まさきもくしてうける
いまめすあれちのうまもてや候う
一生の此様がいを始め
はめうまて下女するてまとねるとし
十九出家 二十 かつら 女郎 かね
此身のこくかのうと出来と流れ去
行ほどかうまて着衆を算とうざ

残ぶるうけていえんへまうさし
おいつりとうくしててそつ見ふえ入
死とえてさへすくいぬおく蘭花
えくちうりうとんと留める弟子さお
あんなしの松で大雨と恋のくく
た茶やへ来て目来るい纔ぷく
目がさめてかつら恋への本とくがてゐる
かしいうきん恋へことそうぶんそ行きあく
弟いせいと大ー白するてん華

之丈が御をおくりるむすめあり
やうの之字にかゝるべきをござく
神仏どいふらもむすめなく
日とすはめるがいやさふてもと哭イ
及ありが身に毎日すん継く手
めしそそをとえがりかけて拾
まうらぃ二三年もとをくん入てあり
知やゝ馬弁でゐらね松田さん
若い姑らしらし見る百さしき

中ぬきの中に出かけ語ころんでる
海ろふまん食のうらりしとちんでる
せさゝでうを伽がくのきの夜中海に他
鳩をとめ毎をそを見ちいがもと
とらうかえり御しさしうでとお茶
とそこきぞん子のないそうふうひうち
こきむすめをおもひをほどいくさおほく
にお姑のつめるこのいうちる當分かる
小寺にかはりちくる嫁の礼

すてきなふとかり神ことさらくいのげ
かん酒して皿と出し吸ものきる
仲つかさ傘やのかさそのふされ
さり出るえのゝしおつ〳〵ふくい事
ねんじんとほしたる十二月
あつまりてあく〳〵る人を見おしく
くかし目ぐまてかほどもるえありい無
志またえまい家のて言訳えて海
まついま無海のすまとる異く

あらごりおてそち一の出ぬれとあ
か海らとどきくしのまん海やなへ出之
今ハ近てちんげぶんすりしさ男
ゐ二べさと女房ぶし汁へ連
大門へ目つけそつけてあれとみん
おしおかり楽すりかきたり迎てある
之文りなつなとりけてその〳〵連怡
多のさのやさふきあべて人が武之人
いま豆了むしハ一ゑく〳〵く

わらじ入れても八文ぶきのハなり
下おてやられて下女をとゆり
世中も男の名をかりずらけ
くら海きか弟子ぞく法師が二三人
在文さしきぶこく日かさの菊より
借金ハ書永手して孔子まで
りけてえくお参をぶらく文のおし
そのおりをうけてられるも立て居る
新くはんなそる車のまへで浴

すらそかとふるかふ部して武分ときき
口鉄か男称つくとうら出給し
雖うえんりもまなそけよしく
はしる貝もあくかし点や下女かな
くらはらとやくへへしは後家をまき
三やくいとむものまへてそうくく
おく家老すんひとぶして馬かのり
はんかえるし月たるがなぶるく
商売とはんとふはきてきつ御しい

十三日かんてらく　寿院　たくへ出かけ
ぞうりとりおし川ハとうふやとさけのさかな
よ儀ごと汲と流にへちけてやり
なりかつのつしとかうしてそざと言る
大小と高らしてさんが　寿らく見
紅やいと佐賀の恵うらやむし更
若房の糸まてしちとうんかとり
ちんやさししとうか見ハつうり
嫁のえける御下絵米　萬壽君より

ほしの本とふ枝が妹おかむ好り
悔りてなしらしてたしと女房して
とりさんがえくいる内ハかるかゆかり
ひさきのえらづらふ言そく若ころ
嵐ほんるで　恋い山きらい　人
あちや尾もかんついて落る眠しさ
よへてもえへても好結い否い
ほぶのれおなるて　江戸中みんなあつ
いまみなゑとと銭斤くし　身

私らんと申してやらるゝと侍とあせ
らの流れてたとゑゝ出ん切おとし
はなりあびつかへ女房にやすやすと
たぐくおんうんは店ておつむしめ
子あけを猫かつよげるおゝに半
みてまるはなでかしづくの母もらしさ
らのしるを姫とはるゝるりおり
おんぢいとつかくぜり人ざんつらへと
やはちよのそしめのと聞ちまとなって

よふつまんる人ときるゝゝおへゑ
せんへりで立よとくるのハ海りくづきを
ぐれつく橋とよおんぶかからどりり
さいはさどしゝ忘ゝしよよよへ〽
海んちゝハくエ北そゝめん唸て居る
本絵居ハ海かりませぬとぐ川とメ
みでむかってさとまつけ計する
得臣もよろしゝし小声て深三位
是節へかけきゝるれて寺へかけ

女房をおいて人にかくしおかれけり
しかるに人とあやしきほどと書
いだしたりけるにかんにん女房逃
さらはやのたちくゑできとかゞみとよ
ひめもすがらつくむすめるが身重
ありけるのそでとさしぐる火燃
かゝむしとさほと車井つけて行
にのおとるゝみるで此方へかけもく
おぬしくてかゝるぬか亀甲けとうふ

さらもとでけぎるくかこい内まわり
様よりハ一ヶ所すくみく女とうら
無ちからさをなげけてこワにワうらめ
さふけらくさいきうつちはいて来る
しかりおかしけても言葉をきんとする
人のしとそでのついてかえんてゐる
かい性でみ丁まで小川あさぎ
紫をこすでん浅ぎをふじもかり
おうしさいらいやゝ目とさまけてくる

かてきんといふ内ひすまし御ござへる
惣じがひろるのかのべ紙て　ち田ふさ
三方の出しさかろとて　さんまり
ひろれさハ　ぎおんを申し　かミ嶋かし
松たハ月ぎん角てそかちんさん
お唐て　ころしくさきれて
高みつのむかい　ましとえられてく
すりもり　をあを　返は出家く
いろく沙下これをえんけてしち

紙合ハさしもれて嫁子とするる
末の器ハしても色々子をぬ松
色らびのあん色んりけ出れしのてさ
らめんめくひろぶめしと　嫁ハかりて縁る
かけみへの所ハ方りハぜんつさ
白かぶ小色みしおえりけ見らびら出
色中の衣裳とうらうけ始まる
其スと思ひし　ひす方と流しふ色ら後家
ちやてい色や　も紙と持てかぶり　宗

おかけさ納まげにふかふさしく
三ツふうんうんとつけさぶ道つづけ
ちつまうんづ大事な坂の近所く
うすべてと知くると本田本町と北
りけぢうおやけと申○して四紙を
のぞきたきしく かゝ申しさがし
生餅をぶどこし へてまうし出る
附ち○ぶんとするとおさまらんだ
しかくし は出紙をり へ出て御○さ

御○げの方 いのが先をし あさかしき
まへ下さへ 出るのは おもらせ なやらく
あふの子まつらけて 曲る 内の 内へ
祈んぶけと ここせん やひとるか ぬ
此下人か みつかおれと おそをぬ
給うそもら 生餅とんざむりと つし
うやていなやとおりの 燃うけしさ
こ今ゆうけとい 女ら かけさまし
その ぶ御んべと 女めてられと 出まで

家の商ぶけハおもくやくざんけてく
毎く酒ハ芸しゃ狂ひ 二三人
大のりしきとくさんひと酒子あそび
男のらしがい有明などをすくし
行ふそく 氏とあんごゆうかめきれ
二つめの噂で女房にかんばうされ
気うちその色と見えてハおはりける
恭しふじん 照の名紙さし
かくれあり 出るかしと 大坂屋

寅之助さんにき出やてゆうゝん
海きかり外の抜ばまおいはかさ抜く
なんのべんとんてうらめとうつめし
横にり座く見あやたいがいのは酒いこ
大坂の役人 尾列は語とされ
廿二日に 五つけとらて見えの
とびのかし おざ出ほ用のされ
やろうの歩いせいかいてが ある人
女房をらはれさとしけてつい善

さんざいハ浪家ながら事く語出されれ
云家病ふおさ人むしんせかさき
十三日おわのわするゝり此まし
こそづけでていを湯づけとなまぐさん
此場立の給むはき母のおゝ江戸入
角との石やしいそすいつける
すまい三まて也おやいとめ出し
きけらやしるべ忘せんとやりてかへらぬき
此れてしんひそられおんれと紛ひろん

すき田をわそんざゝんげぶとくおね
此段をかけりへえかり此ゝけてし
小者備わく見合にのハ二夜めく
りゐあしてゝ泳かの川ふく母ぞなふく
目むさる人ちまくハくちのさり
これふんて今お此り我茂とま
走うこと出しく由げ村へちくし行
加まれのちんやろうとばはつらく
うらくへ此なふんまし　十五日

門トでるく娘がむらのきぬでいきや
出スましきかく御茨武士と出し
く四坂がかし々森て居るやし小兆
てきさの縁いちかいて居るく縫ひて
よくと影の中し小して娘かるしおい
七りんで七文がしるちづかして
三ちかりで日かしのかくで附ふ
我るらり居ると子そでハオツえらく
新茶屋でまうじ。かくる秘かしさ

おきくハもうじうら門ハ万矢く
なつい鯉ら川てつぶかの空と称すり
大きらい湯場で赤くしおつこし
ぶら吟けてやいよやきんが一ッ四く
場井丁ちてるく入るくつまいも
石屋のうへ表口し笠むとら
十二月十三ぢんのなりくさ
きまやうじハもごそうるぞでなし
十九とサみといもうちがなし

切ぬいさ判とりんこをしむきむきさで
きんすとかしく見ふめ孫へ手本く
え日ありしかし下切られさ候
てんかくとゑみして出て夢やどく
与り紅や川よの穴とふさいてる
味出しハすつかしくゑくも掛り
かきとせぬおしく菜かく孫らしく
様ろり捨だ身イのがよめのぢい
おやどもたちと風へまとり方

おつ江戸かくと名所おハ御呼く
すみさ川香の若て出く大の子り
おくさ田もまれ飛び行も捨の音
まろしくふりつて出しの穴として
くも白かな流ころの二人り出てふせぎ
きんきやの女房かしこけいもハおし
おいろハえる西町しぬ云葉おり
おしいまとや孫宅ハずんはかしきり
十七歳としてんハいのふけて油し

こゝのとがり御ぐしさしてまとおぼし
すこの両人中にていつきされ
せいぶんの札をうでそくうでいまり
あさし小松計申さ候へく
ならふ事へ駈るとくし候で並とメ
枝ゐかしその手紙ゑてすじと見る
内出入の手婦屋からかゆしかり
華もんり専業人いれて方のをまち
牛くさのおし母の出紙る　十六日

ひげしゝ以前もなつ母の見所く
夲の師へ仍つ見紀しやいましてて
志いりこい宗家と引ていやうつま
そのく書き頭と下さまり書き状
うんのいろ風ハ車器すなり
初午ハ角こつこそかりさなりしい
そふ紙とちんもりと金表の書
ぶんつけのあし洗とゑて下世すと
ゑ参てとえてそるい事ハ　気しくさ

廿八丁

寛三月別会揚題万句合書抜

かりうは御代演つも銭とりげ　雅情
ゆうれいの八分ハ浮名でしまり　李伯
絵かき書く時多く一ねぶり　五示
太夫かのふしぎの山とうかめ　百輝
若殿部ハおしいそれん添とさき　百菊
ぜんちくハ了方角の行儀く　仙翁
そこらうしナ一二年元らく　玄睫
茅やのなまへとこゑるを見て　如の

十七会廿三ノ二十三

庚申一ツふらんと云ツ袖ちらく　不庵
おりかく石か書つゆーいとハ御しさ初むし　花口
さんか武士はかのかくしむすけ　吉山
以上人と思すさおりけふ花見く　亭之
ふし山とわく作事か表は三ず　吸川
武帝くの名ぞかく谷て入れ寺か出　百子堂
之らせ之は内で守との恵き　井筒
修行の一ちん大石ハおきやい　石斧
鍋々不守主　て見りハく見く　蓼成

ふし出有るの方して存恩　雪好
河のみらんをさして先ハはめきき　同く
一の人二ツ心の上てうきのこり　羊蔵
おもし云ハ出身ふも丹たてり　不示
子めきの世所承を手洗く見　不麻
はいそして一町の年廻しさ　旦麻
出家しりんとやいしめん今や縁とと　口郭
ふらんなら御をこまい悪々人ちら　不逸
神ふさこ御しぬ世八　大一衣　旦府

まゆしくしまたてをやせへかり　川里
ゆんおもハヒわかりのつらく　寄年
みすミ次へかけなく湯もすまミ　重泊
二人りけ云いるんとある大一在　一町
あらでのふるやおたいひさてを　仝
ましいかりまんばへ引て花ヵハでき　長如
はあんの八祝又の代すらんごおも　如蘆
ふてがえへ裾へへかひあとに　家称
縁ぞの弘川そりすぬき蔭しさ　子示

埋むもも霜女がはると長水まおり　南年
うミ桜のちいさんやつらほつかに　瓶戸
嵐とよいる娘有し母こ傾り　之町
よはしいのせこかやんとら乗らい　瓶声
石里のよ坊ヵ上下と着れ之　一柳
老い身のまふて曲ある　初る后　之漣
座ぶの出るやんごすのぶて春ま咲　巴守
春さあんでんと下ヶて主てさそい出　眠瓶
又長ヶまおくへかけと記る　名　馬鶴

うそでないきうじハ二三歳も母ふ妹　四郎
なやつりとすく嫁入ハべつうれ　鍾梅
尾かしらのないハせやの初かつを　久照
煮らしハ鰯けの見せびらかさ　洗硯
物をえて仲人のなんきく　文仲
ぬきのなるくのハさかれ白帯る　文洞
うれて立かさとハびいきかえ新　寺国
門トの表うゝも文作りしも　嗡臍
年礼の筋もひ出て鄉　雨　汲楳

まわりてハいうそつかぬ遠ちかせす　春暁
表れとまだ引してまかしいうさ　掃風
六ツ鞘ふ敬うへ石といふ無間ぜい　蜃虹
国十郎てお舞しさと丹くろう　雀老
の後川にいのつよおうしぜん射　卜文
出むうれて斬れ被へ紅か道　ゑびす
ほそ川しとえてれむるさ分陰　眠擽
六十同ひ丹でんの泣えんさ　操者
不あれ也まものゑれぞれ小盤く　亀遊

ワすれさがつんなまて蛙とかまきり　李牛
拇がらて椽の子ぶら中ふ炭しさ　瓜流
冬すらハすくたびうし京へ紅し　一柳
己菖と毛がおせいのふかく　瓜流
くらつとのりくらふする月見く　亀舩
咄いちおつつ喰れてつくろ芝溯　瓜流
とく湯りの気色りさがのとお針ず　燕子
らん青がするし信ぶくらり出し　千示
二十さん冊らしぶくらせかつまく　生之

上下と江すり意ん中のよさ　瓜声
ちんじひらうぶせい人の襟めく　質奐
三日はハむひろて他人おて褌い　下村白
いさしおこるべハこのくびの時る　壬
ほうりしの小ほしけハ心すせ　秀盛
蛤手むりゑしして乎とうきさん　弓光
のミて夢じとあんけるる巫女　松色
三郎とたしのらう菊のでかし初観　旭枝
ほくしらんさしてまさらんでもの数　仙游

あれはこ三日まで雨ふりと山桜そ　仙洲

木の下のざい人がうけとんと珍　百寿

りう乳母すがり　のがちらしく　仝

いろは御子とはうしても笑つゞきも　妙子

まんけのと座のと琴でふりと付　石翁

さじかげんころりと目がさいかし　桃李

高く舞ふ時も小粒と付さてし　石斎

糸ふそとかへひてびいとさうり付　仝

よま時入汲んゆくしとして酒かるく　仝

りはよくされる寝て居る座敷め　未然

天子口がうり一度ゝ御さゝ入しさ　名琢

おしとかしり川へ出るや下戸が人　仝

そ兄が芳ばしや人をいそ立寝り　同く

かつてうりの毛が二人ばかりのこり　可楽

まよひしとよしと目とりからも子丈夫れ　萬交

てへも羞イかとかんがゝ気びす　可笛

かゝ川弄る　いかゝひつとおいゝらせ　可与

おや云ふるし　いとかる衿ひつくき　柳枝

あら川ら人ハ来ぬと宴かへさまき出し　雲
よ〇のありとよしおてすゝ出し　右計
やきさしひぞとさ山のゝ紅葉と出し　英
あ内もづりしい秋ざよくいそつらめ　府
見る人ゝ日和とはめる旅ろ森　号
人ゝ手しんびして右海ふ風の傘　眠枕
しらゝかさ水門沖へらそし　葉十
居ぬむすゑ香とそうけてのせんざく　眠枕
先の山入ゆう見出居うと笑顔花　着芝

きかへ宴まゝ子山のはしきれ　口柳
その海てさ居ゝのちとさつひく　梅介
百夜ハ左面ひ氏ゝし初ゝ母　口柳
秋るの夜　私の人ハ小出くし　号
母の梅つらてさ面くしその小松　屯
左手く鬼しとふ手し小出下よの光　葉十
ひとヽとはぬうけ作父小ちて出し　府
夕めもよしふゝハしヽ入ぶりの桑　号
十府ゝ出ると皇ハ年若と　垂　眠枕

にぎやかさござ敷しおしらぬ上下で㐂　淡路
わすれ草のまへし出でて行く道　仝
引まくの御金かしまて年のくれ　花口
月入りかゝるものと揃ふや上　冬紅
きざみ手らしなでなまかしく　取方
しぬかつしにめと梅の木へ帰と出　雁紅
冷への糸からみかふして泣やませ　仝
もの吹へけとあつけてくとくさ　花口
松弟舎　松川氏のひすめかり　和里

月と日をしゆきさかひとんかやに　侠房
右二山かかり川そふみぐと九十川　雁紅
ほめか出ルまして行うら八内がまを　花江
どうぞで上落り雲居ととまのけ　仝
和名とめくり日とつぶ出小弁　夕照
りん惣ん延西ほしとも恭く恐ろく　風記
そりゆくさの花の木とせいまんて曲　中葉
まとむしてくんかと宮丈くりとこき　之町
営よりも第ん廿八二手ん公ろいく　一江

ゐなかのかたしこくとふかくはなち　庵子
惜れそまんと見しさゝまてきき　山鳥
おほろ月の十が多みとしひ出し　奥更
まさらしのをやんどうひらい　玄示
夢をんくりゑひと木山さしける　山路
むの山ほり出家か二三人　枝鳴
ものやも六人の心ある宿　石菊
哥しんかうぞれなるいて薄き　毛尼
そうくやくうしけ山のぶかり　吾仏

朱ちんふくでこ川その郡さき　文仲
あひのふかとつせろのかてゝ売　亀洗
よふ江のそはそらふみしとき　季[illegible]
いと花八もうちであさ白くすゝ　仝
うるの日のはありきん出ちゑ　下[illegible]
入内そのくされる花て芦床く　巴幸
今ぞんま新ぞうとくえんて奈り　仝
すしや池なさ経のたゝかしきのつり　明し
吉永一坊ハとていし出門てのけ　仝

むはそやくおしらく伊せの薦　花以

をうらハ西浜に宿ハうらむし　芳筵

いもうとへ流るかけおし訓る　仝

花あかり空湯すると月しでうき　英蕀

遠ひ樹にかけて浅黄ハ寒う暮　花牛

流えの家やまで御まつらし　賓貝

木のれしのふおいさ形ごの小路ごの　英蕀

さんきの刻をのくいさして馬おひ　至方

ありへとはるる高派きる紅葉　仙鶴

たのの滝く走小月るとするなりし　仙鶴

はいるり小姓ハつるごのか鞍ごの　坪山

莫しさ十日さや〜たさ帰しれ　仙鶴

角とある去る寺小おかめと来て乗る　仁救

あるく人と右石左うれて岩ほめ　岩幌

かけ丸のかうれてとく鳥の風　石露

鐘小かよりたしこのかうけそ来る　仝

そや切けよりもゐるまゐる切おし　茅子

此高ちる店のくう成て秋葉ぞす吉き　名石屋

三年ふ下目手ハしけふ取る　杜子
花の露紙とまんめていのらく　蒙年
秋の月女房なくあもくふ暮く　雲子
日も春もそめ本も母のむすめかん　芦雪
もいふさと取らくたくが出来る　全
ぬめりけのぶうび藤あうれて居　風跡
我らくのえたぐ代、三出　惟孝
こみりさじきぶんて居るの御さ　西獅
かうへいびてん松ふつさい内でよ　石斧

よし原のかゆきしきものやいや川　西獅
くま袋されとハおろかなでこぼり　全
いれ込でも女房すんと石　石斧
女すんとひきい東へ色はく　風跡
かんざしてお顔へ出きん出たつと拾　雁
あさの内しりて口ぶ人それて居　石波
のさ夏と二度しけ合てくやしく　武藤
ぶんこんの御じうり二てしかけさせる　石斧
十あなすると丈をふひ治ろる　孝坪

海山をこえて幼のふをしてゐる　李年

てらにあづけし年が祇ぐらいのほ　之蒼

お嫁が来て酒をのりとまへころし　柳谷

金は金でたまげしもしつけ汲ぶ　仝

たしげる六大事の佛犬ならべる　六扇

女房ころのあもりのハ弟ら若不り　樟引

色つの年おしいかもつハふたれて来ぐ　呉吏

かたりれくさへ出やらすと和尚て　浮江

紅切場へ出尽いよ紙拗て来る　草莫

御金の見せふあそけのゆりけ　六団

ぐちく代はそ打しかんぐんて也　六宗

色あてハ人がつ恋うさんへとんぐ事　六雀

そいでとり御代しまず度手箕之　六千

正行とぬいて義な笑なと　ほど　西鳥

きんでるをと弟らまた孫とりまる　仝

九ッし へ湯やろしとアまお　湖江

なついふとめ向きてひろく一人去　田廓

年のよくさりしやの世へいきを咲　西公

ゆふやゝさむく成出入かゝり　柳悲
袮さむとはよんそのそばかすりちる　吉山
がゝれ打志んの山の近道　如琢
ほり出す事なく二三立の菊や三人出し　四郎
ぶつほめる事し小袖は八丈世帯出し　而生
よらぬさき志ゝりり小滋ゝほしく私　旦府
ほゝむとして気にしよと流かりと　琴英
小筆てんけてきそのくいつとめちる　而生
悔りしとめて花を一大ときさ　如琢
うけ梅小枝のてとゆるぎ泊つでく　川里
おとり子小かゞやれと菖蒲ひきとて　四郎
去の年末小は小三文をそえて出　西国
そむらさて集るのハあちらかめかゝ　斗石
犬ハ目ゝ行るのふつ一て気のかり　梅翁
よ川ゝしさこそ一そのこゝやおく　斗石
佛おゝしとさも色こハさくのく　京融
三倉のそらいつもとふ芽とゝるさ　梅印
下ゝ事する名でおてもかさを出し　全

風サめやもせじけれ来て出て　和池
まち女へ本ハ今しめてる　と人が　仝
ちくしとハむさき年寄やく小作人へ　かな嬉
ちよろつこいみを見て居ら遊ぶるひ　後楼
てのしひどくかひ娘やらしつ　とひ　歡吐
やわらかどこ三味出ともまつくいし　仝
よ次よかりとのおへ遊ぜとす一　浅喜
よその子のてひありそそんやましを　帰白
山王と神田でもちまき全盛風　沈口

ゆしきみく己のけ小かきつきる　浅蕉
みんなしとすりを留じておやすく　かな麦
若男とむし浮世て己ちのかし　川甫
よくしみつ美かとめしさ　娘　泊　南浜
みなあるしを入しくる傘とかし　硯雪
色の　この庭へ入らって見つきる　梅成
嫁くさつくして見せてから嶽遊　文林
丸あら菜種小浮かれし　花的
下女小ありむし八重と嫁知　田舎

あすぎいつかさにかほどみれとまよひき　塵如
ア衣ごしおしあてやろうと仕て　仝
二人ともまざくらかけらく　春雪
ききめいのあそびに大ふるけ出し　仝
やせあしけていこる帯ほどいて寝　久吟
後つけ口やらそうめ夫はいかない　松嵐
としやなぎものまうしろうでそふらく　仝
石ふみうをつかんでもちあそびなき　東花
四十結句くしすめのここと　松嵐

車座にかへびちら風がこまんなり　カスミ
まむしとなる日書房にてつけりを　松嵐
私のぎいり中をみなきん出来らく　鍾光
石ぼろく小文はかしのよいかし　季休
よく加減に大とおしうけさるべき　此流
寅はかの文字ちが関とちぐとたち　玉章
とうぶんは出かくいそぐつまらきさ　石翁
三づらうかうちまでと大成らまく　仝
とらが代はそれるか　廿掛しめく　美文

はいそばのはゐと成る三月生さ　十口
おかいとせぬがよしさだかちどく　玉簾
糸とみるさく穂花の席ろれしく　吾鳥
来てかんぶさでも君やとぬうとかや　玉簾
そ月やのいきりきし大名て絹と揃　出雲
せん人て出やめしとも打て外り　雀芝
涼ごも音ぐいちのこゑと連してる近　門柳
く坂坂八のびと逢ふしが、さちどく　亀径
まさ出入りしかするぬ君のその　出青
そうれさて人花つくと桐みおい　蓑江
みさしくもよい方ととらかさとけ　小て
中そり入行とくくくみふく店　梅枝
かりふしてろと宿てなれでうもる　浜柳
四月八日ハおろのえしじめの之　亀径
てかしくし君の手りしと出つ引　京政
早くきさこびけて大とときりこ長垰　鳥逆
今の頃一日みくとめうれく　眠狐
みていあきしきぞてハといきて　烏吏

けふものも五町てゝ八切らるく　業十
夜とゆくと乞いんと和尚出し　仝
あしらひき銭を掃ふしてまく　十口
花犬をえらい日々くれらく　不二
売は是てくりかけ咲き角田川　魚交
流々へよとかけるで酒の息がさめ　甲嵐
大三十日お町ひいゑいが十二文　三羽
松山さんが隠しい人金しるさがり　川柳
蛙の恋ら出下すじいなさけ除し　面輝

見ちらあきていきかきのけ御子出し　芳本
ゆついて小袖とれ々ぶけ通し　文袋
大名を捨ててれ京江戸へ出し　竹露
袖の梅ゆれとも書房くくいせん　武藤
とらるんすんなゆむらのことゆひ　糸清
たゞ口のうへかゝるやしいけて通　雁狐
金目ゆはちゝい二ゝいのうへと夢らる　東了
もかけちりすねぶる小さゞとして　老之
わをとつ孫てらふのせんき　世ゆらひ　不扇

凡そしけるいろ〳〵との切に　糸了

今旅と見えるびけて初り柳　一柳

女しやの花ミそへとかぶりまし　蒼江

二ふ咲二の
しらの谷生
　　　　　　　　　濯雲

楊丹

水錦

○俳諧風書品目録　江都上野　山王之旁　花屋久次郎

俳風柳樽遺　十冊　川柳点句調附代々　四季恩雅[illegible]

同　川傍柳　五川柳点　五冊　同　やない筥　五川柳点　二冊

同　柳句種[illegible]金道編[illegible]上編[illegible]江戸[illegible]著

[illegible]

同　[illegible]　同　[illegible]

俳諧[illegible]